エコバウツアー視察記

ドイツ・エコロジー住宅 エコロジーとエコノミーのギャップ

ハインリッヒベール集合住宅／ベルリン 1

プロトタイプがたどった先進性と現実

寄稿
㈱LDKHOME&
LDK㈲
代表取締役・玉田敦士

たまだ　あつし
建築プロデューサー。1962年 大阪生まれ。建設会社勤務を経て、95年 建築プロデュース会社LDK inc.を設立。同代表。「WIRED DINER」を始めとする多くのカフェ・店舗を手がけ、現在は住宅プロデュースから企業コンサルティングまで幅広く手がける。

11年前、私は第1回エコバウツアー（イケダコーポレーション主催）に参加した。そこで今回は、11年後のツアー見学個所のなかで、ドイツが苦悩しながらもチャレンジを続けてきたエコロジー住宅分譲地の実例に焦点を絞り、実感を述べつつ、ニッポンの建築の「将来へのヒント」を模索してみたいと思う。

10年の時を経たテーマの変化

地球環境や人間の健康に最大限配慮する建築や住宅の仕様を、ドイツでは「エコバウ」と呼んでいる。「バウ」とは建築という意味。私は11年前、その時すでに先進的なエコバウを多数見学し、衝撃を受けている。

今ツアーの最大成果は、11年の時を経て、エコバウが集合体になったプロジェクト「ハインリッヒベール集合住宅」を見学できたことだ。

地球温暖化による気候変調が実感できるようになり、環境への配慮の切実さがいよいよ現実味を帯びてきている。その一方で、グローバル化し加速する市場原理主義に、誰もが翻弄されている。

写真1：エコロジー分譲地のプロトタイプとして、1999年に竣工したベルリン郊外ハインリッヒベールのエコ集合住宅。美しいグリーンがふんだんにあり、住まうものを優しく包む

1999年の実例 その成功と課題

この集合住宅は、エコロジー分譲地のプロトタイプとして、1999年に竣工。4階建てで1棟あたり約25～30世帯のマンションが17棟。合計450世帯というかなり大規模なものだ。

そのうち75%が賃貸、残りの25%が分譲である。日本の公団住宅にありがちな、合理性や効率性のみを重視する真っ白な四角いハコではなく、共用玄関を飛び出させて、斜めに振る工夫など、建物に凹凸とリズムを演出している。

また、色彩的にもドイツ集合住宅（ジードルンク）の伝統ともいえるオレンジや水色の絶妙な色使いを駆使して、見るものに優しさを演出している。外構のガーデニングはすばらしく、住むものの感性をその都度刺激する樹種を取り合わせているのが絶妙だ。

そのグリーンのグラデーションが、壁面の色使いとあいまって、新しいタイプの集合住宅として、いまだに完成度レベルは高い（写真1）。

これが今多用されるようになった「エコバウ」仕様の典型例であり、そのオリジナルがここハインリッヒベールなのだ。

写真2：住宅地の中央広場に設置されたCO_2削減量の液晶表示板

それだけに、精魂がこもった企画設計力を感じたのは、私だけだろうか。

この建物の構造は、なんと木製ボードの積層躯体。木製のPC工法のようなユニークな考え方を採用している。

当時盛んになりつつあった建材の環境負荷議論、「すべてが土に還る」という意味を反映させた、果敢なチャレンジ例なのだ。

10年近く経った今でも、躯体はしっかりしていた。内部の仕上げ材はもちろん天然素材を多用し、ニンゲン第一主義＝バウビオロギーを実践している。

生活エネルギーの自己自給システム

一方で、このプロジェクトが特筆すべき意味をもつのは、地球環境への配慮を、450世帯全体のライフスタイルにする試みだ。

その中心となるコンセプトは、生活エネルギーのエコロジーな自給システムである。各住居棟の屋上には、巨大なソーラーパネルを設置し、450世帯各戸に、一定のルールで電力を供給している。

また、木質の廃材を再加工したペレットを燃料に、温水を供給する施設も共有。敷地の中央部には、累積のCO_2削減量を住民全員が意識できる電光掲示板（写真2）が設置されていた。

これらの施設を共有し、エネルギーの自給をシステム化するには、450世帯程度の規模が適正という判断があり、そのため75%を賃貸にしてプロジェクトを成立させている。

このプロジェクトは「GSW」というエコロジーをコンセプトにしたデベロッパーが、当時のシュレーダー左派政権のムーブメントにのって、住宅供給公社の補助金を起爆剤に成立させた。

案内してくれた設計担当者の説明によると、賃貸棟の住民は、必ずしもエコロジーコンセプトに共鳴して居住しているのではなく、公社の低廉な賃貸料が魅力になっているという。

その結果、結束の固い分譲棟の住民と、発電システムや熱源供給のルール、運営をめぐって、トラブルが頻発する状態であるという。

一見すばらしい住環境に、エコロジーとエコノミーのギャップという難問が横たわる。エコロジーコンセプトを共有する住宅地のモデルケースは、10年間その運営をめぐる問題の噴出に悩み続けている。

私は、そこにリアルな実感を共有することができた。なぜなら、私自身エコロジー&エコノミーの観点から、地道にコンクリート外断熱の建築に取り組んだ結果、「エコロジー的観点」での営業トークの困難さを、日々実感しているからだ。

エコ分譲地に関する今後の問題意識は、住民や事業主体のあり方と、共有コンセプトの実質的なバランスシフトが、厳しく問われていくことだろう。それは明日の日本の問題でもあるのだ。

より良いドアをお求めの方は
扉革命でご検索ください。
http://kuroiwa.ikw.ne.jp
開発販売 RDクロイワ建材株式会社 TEL.03-3816-4317
〒113-0033東京都文京区本郷3-18-1奈良部ビル5F FAX.03-3816-4318

本当に「人と環境にやさしい家」を一緒につくりませんか。
「エアパス工法の家」見学会
参加者募集
●日　時 11月22日(木) 13:00～17:00
●会　場 福島県郡山市（株）四季工房本社・ほか
●参加費 10,000円／1社（3名様まで）
真の差別化を実現する充実のバックアップ体制
施工研修　グループ会員各社が家づくりの品質と性能を均一に高めるために、定期的に「施工研修」を実施しています。
設計講座　日本を代表する建築家を講師に招いて「設計講座」を開講し、会員企業の設計力のレベルアップを図っています。
営業支援　営業研修会をはじめ、各種販促物制作、セミナー開催をサポートします。
「家づくり見学会」に参加ご希望の方は!
会社名・所在地・参加者氏名・参加人数・電話番号・FAX番号を明記し、「エアパスグループ加盟募集本部」までFAX（03-3546-8027）にてお申込みください。
エアパスグループ加盟募集本部 TEL.03-3546-6010
〒104-8127 東京都中央区銀座2-13-20 東武ハイライン銀座ビル5F FAX.03-3546-8027
地域主義工務店ネットワーク エアパスグループ TEL.024-937-6401
〒963-0111 福島県郡山市安積町荒井字猫田56 FAX.024-937-6404
URL http://www.airpass.jp　E-mail info@airpass.jp
「エアパス工法」資料（無料）請求受付中　人と環境にやさしい「エアパスの家」の詳しい資料を差し上げます。ご希望の方はエアパスグループ加盟本部へお申込みください。

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

ドイツ・エコロジー住宅 エコロジーとエコノミーのギャップ

寄稿
㈱LDKHOME&
LDK㈲
代表取締役・玉田敦士
http://www.ldk.co.jp

たまだ　あつし
建築プロデューサー。1962年 大阪生まれ。建設会社勤務を経て、95年 建築プロデュース会社LDK inc.を設立。同代表。「WIRED DINER」を始めとする多くのカフェ・店舗を手がけ、現在は住宅プロデュースから企業コンサルティングまで幅広く活躍。

前回に続くドイツ・エコロジー分譲住宅の可能性と困難のリポート第2弾。今回はポツダムの例に触れたい。繰り返しで恐縮だが、「ツアー最大の功績」は、耳あたりの良い牧歌的エコロジー話ばかりではなく、現実に即したエコロジーとエコノミーのギャップを、失敗例も交えて紹介してくれたことだ。

エコロジー分譲住宅の適正規模

前回リポートしたハインリッヒベールでの、住民意識の『温度差』という深刻な問題は、私にとって最大の関心ごとであり、再度触れることをお許しいただきたい。

この問題の根源は何であったか？答えはエコロジー分譲地の「適正な規模」である。

単独のエコロジー住宅＝「エコバウ」を集合化してエコロジー分譲住宅にする開発側の意図は、住民意識を集約して地球環境を持続可能なものにするという、未来像の提示にある。

単独のエコバウ建設は「自分の個性的考え方」であるエコロジーを、「地球にとって今必要なこと」として実践するという自己満足を、公共性のステージに上げ、広く認知を図ることにある。

加速するグローバル経済に対抗して、個人レベルによる地域経済の自律と相互扶助マインドの再生が、その底流に流れるテーマだ。このあたりは「エンデの遺言」（※1）（NHK出版）に詳しい。

エコロジーをいよいよ公共性（地域主義）のステージに上げるためには、エネルギーの共同自給システムが、キーポイントになる。

これがペイするための重要課題が、分譲規模となるのは当然のシナリオだ。現在、ドイツも日本も直面している壁はまさにこの一点に尽きる。

エコ住宅公団GSWの悲劇／ポツダム 2

分譲の適正規模をめぐる日独共通のハードル

旧東独・ポツダム エコ分譲地の困難

そうしたハインリッヒベールの課題が、さらに深刻な状況で出現したのが、ポツダムの分譲住宅であった。

われわれ戦後日本人の脳裏に独特のイントネーションで残っているコトバの響き「ポツダム宣言」。そのご当地ポツダムは、ベルリンから車で2時間ほどの高級別荘地である。東西分裂時代、当然この地は東ドイツであった。

今回ツアーは、売れ残り家屋が続出し挫折した「ポツダムのエコ分譲住宅」の見学がコースに入っていた。なんと良心的なことだろう。

私は、この教訓を見せてくれた主催者とツアーコーディネーターのホルガー・ケーニッヒ氏（※2）に、心から感謝している。われわれが直面しているのもまったく共通のテーマなのだから。

ポツダム郊外の広大な敷地をバスで行く。ポツダムと建っている印象のその分譲地は、やはり典型的な「エコバウ」の外観だ。

広大な敷地に建つ典型的な「エコバウ」仕様の外観。ワンパターンの印象を否めない

外観の色彩、ソーラーパネルの屋根は、ハインリッヒベールの小型版である。全体で30棟足らず。その30%は開始後2年ほど経つが、いまだに分譲できていない。

当初この分譲地は、ハインリッヒベールと同じエコ住宅公団の「GSW」が分譲していた。しかし、今年そのGSWは、米国系ファンドに買収されたとのことである。

この企画は、計画上の収支では妥当であった。東ドイツ軍の戦車演習地であった調整区域の敷地を、低価格で購入。インフラ整備は、ある程度国家が行った。

また、環境省、国土省の補助金も支給された。

ボイラー室。30世帯の住戸が共有する木質ペレット燃焼型のボイラー。温水と暖房熱源を供給する、現状の典型的システムだ

「旧東ドイツ、ポツダム市の官僚主義がこのプロジェクトを暗礁に乗り上げさせた」と、ケーニッヒ氏は無念そうに語る。

結果的には、30戸の先行分譲に、木質ペレット燃焼ボイラーを1基設置して、温水と暖房熱源を供給することに。

しかしこの設備費は、各戸にコストオンされた。守るべきエコバウ仕様との確執。最終的にできあがった住宅は、コスト削減のため、薄っぺらな印象のエコバウもどきになった。

しかも、分譲価格はボイラー分を含むので、さほど安くない。最終的に不人気の結果になったのである。

GSWが買収された後、残りの分譲地は様々なハウスビルダーが、シンプルモダン流行モードで、住宅を建設中である。もちろんエコバウではない。

「個人の個性」に訴えかける営業トークは、エコ分譲住宅には向かない。結果的に、エネルギー共同自給が「お得です」というトークになる。しかし、イニシャルコストはかえって割高になる。この矛盾サイクルが、エコ分譲のすばらしいコンセプトをなかなか実現しえない壁にしている。

適正な分譲規模と補助金。タイアップする民間大手とのチームワーク。開発主体の必要なバランス感覚に、いまだ「こうすればいい」という明確な答えが出されていない現状は、茂るに任せた雑草に冷たい秋風が吹き抜ける、広い空き地が証明していた。

※1：ドイツの作家ミハエル・エンデ（1995年没）が、死の前年、NHKとのインタービューで「新しい貨幣システム」を提案。それがビデオや本として翻訳販売された。彼は、現在の貨幣システムには①購入代金②資産③資本という機能が一緒になって、それが国や企業に競争を強いて、第3世界や自然に矛盾を引き起こしている。③はお金そのものが商品や投機の対象で、ここに精神の荒廃を招く問題が潜む。もう一度お金を①の実際になされた仕事や物の実体に対して払われる価値に位置付けるべきだと提唱。この考え方による地域貨幣がスイス、オーストリア、アメリカなどに広がり、マネーゲームの脱却、第3世界の人々と自然を破壊しない、新たな観点を広げつつある。

※2：ケーニッヒ＝フェリケリウス建築設計事務所主宰。バウビオロギー・バウエコロジーを踏まえた住宅、施設などを手がける。1996年よりエコ・プラス社設立。建材の品質認定およびコンサルタントに携わる。

より良いドアをお求めの方は
扉革命 検索 とご検索ください。
当社ホームページがご覧になれます。
開発販売 RDクロイワ建材株式会社 TEL.03-3816-4317
〒113-0033 東京都文京区本郷3-18-1 奈良部ビル5F FAX.03-3816-4318

NEW PRODUCTS
家全体を外側から断熱材で、すっぽり覆い包み込みます。
より進んだ「Q1」で外張断熱！
【キューワン】= Quality No.1 Board
あなたの身近にいつも…アキレス Achilles
より薄く、より軽く、より施工しやすい断熱材〈キューワンボード〉が「暑さ寒さ」から守ります。
新製品《キューワンボード》は省エネ・健康・快適・長命を追求した次世代型住宅用断熱材です。
寒暖の差が大きく、湿気が多い日本の気候下でも、建物を熱や湿気から守り、長期間にわたって高い断熱・気密性能を維持します。
部屋間の温度差が少ない快適空間は結露によるカビ、ダニの繁殖や、冷ショックによる健康被害を抑制します。
優れた温熱環境とデザイン性を併せ持つ《キューワンボード》は、開放的で機能性豊かなパッシブデザインの住環境を実現します。
熱伝導率（初期値）
0.0186W/(m·K)
断熱性能の優れた硬質ウレタンフォームをさらに発展させた、微細化気泡の高性能硬質ウレタンフォーム《キューワンボード》を新開発。
独自開発の超低熱伝導フォームを「キューワン」と名付けました。Quality（クオリティ）No.1を意味し、最先端を目指します。
特長
●従来の硬質ウレタンフォームの発泡気泡の構造を一層微細化することにより、初期値0.0186W/(m·K)という極めて低い熱伝導率を実現。もちろん地球環境保全に貢献するノンフロン発泡です。
規格
●厚さ 30～60mm×幅 910mm×長さ 1,820mm
●両面アルミ箔張り
新登場 超低熱伝導率・高性能硬質ウレタンフォームの外断熱材
キューワンボード
アキレス株式会社
断熱資材販売部
本社：〒160-8885 東京都新宿区大京町22 TEL.03-5379-4564
関西支社：〒550-0005 大阪市西区西本町1-14-15 TEL.06-6534-2170
九州営業所：〒813-6561 福岡市東区多の津1-1-4 TEL.092-622-2871
北海道営業所：〒061-3241 石狩市新港西1-726-3 TEL.0133-73-9591
ホームページでも製品に関する詳細をご覧になれます。
また 詳しい資料をお送りします。⇦左記の 断熱資材販売部 宛に ご請求ください。
ホームページ http://www.achilles-dannetu.com/

ドイツ・エコロジー住宅 エコロジーとエコノミーのギャップ

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

寄稿
㈱LDKHOME&LDK㈲
代表取締役・玉田敦士
http://www.ldk.co.jp

たまだ　あつし
建築プロデューサー。1962年 大阪生まれ。建設会社勤務を経て、95年 建築プロデュース会社LDK inc.を設立。同代表。「WIRED DINER」を始めとする多くのカフェ・店舗を手がけ、現在は住宅プロデュースから企業コンサルティングまで幅広く活躍。

これまで2回にわたり、ドイツ・エコロジー分譲の苦悩と混迷を見てきた。そこでのギャップを超えるキーポイントは①分譲の適正規模②開発プレイヤーの合理的編成の2点。今回はその成功例として、ハンブルグ郊外でガス会社が開発したエコ分譲地をリポートする。

分譲地の入り口に位置するソーラー発電所。地下に高性能施設を持っている

ガス会社開発のエコロジー分譲地／ハンブルグ 3

経済的な「出口」設定の重要性

設計の話から開発の話へ

戸建て住宅におけるエコロジーというテーマが、10年前くらいからようやく市民権を得て、いままではエコロジカルな建材のラインアップが日本でも非常に豊富になった。なかには検索ワード便乗型で中身のない商品もあるが、日本独特の素材感や伝統を生かした商品も多くなり、住宅文化に定着してきた感がある。

だが、これまでのエコロジーを標榜した住宅は、ドイツでも日本でもワンパターンな「エコバウ仕様」が多く、住宅本来の「生活を楽しむ」というモダン要素の表現に欠けている。

今後は、日常の「生活の美しさ」を住まい手が再発見できるような、秀逸なデザインとエコロジーの両立が評価の対象になっていくだろうし、なるべきだろう。住宅に対する愛着の持続こそが、住宅寿命の長期化やその価値の維持にとっての生命線なのだから。

その一方で、エコロジー住宅に対する関心事は、戸建て住宅の設計から、集合住宅、エコ分譲の開発へと、確実にスケールアップしている。温暖化をはじめとする地球環境の劣悪化が実感できるようになり、将来の世代から環境を先取りして搾取しているという指摘がなされている現在、当然のことと思われる。

しかし、エコロジーとエコノミーのギャップが常にジレンマとして横たわるのである。開発のスタンスと経済的な出口の設定が、必然的に大きなテーマになってきている。

ガス会社が開発した豊かなエコ分譲地

今回は、エコロジー戸建て住宅の設計コンセプトと開発手法を、見事に両立させたガス会社開発実例「ソーラー・ジードルンク」を紹介する。

ハンブルグ市街から車で40分。北ドイツらしい長閑な田園風景が現れる。分譲地に着いて最初に目に入るのが、小さくて機能の露出したソーラーハウスだ。なかなかかっこいい【写真上】。

これが、この分譲地の電力と温水供給をまかなっている発電所とのこと。世帯数にくらべてコンパクトな印象だ。ピーク時に供給量が不足するときは、ソーラーハウスの地下にあるガス熱源の装置で発電量を補充する。

様々な意匠が精魂こもって建っている豊かな住宅地

なぜガス会社がソーラー発電所を？といぶかる気持ちのまま、分譲地全体を案内された。約200戸の大きな分譲地には約20戸単位のグループで、実に様々な意匠の住宅がある。

一般にソーラーパネルが目立ちすぎる定番のエコバウ仕様と違い、それぞれ工夫が施されている。特長を表現しつつ、全体として調和しているので、流れる空気感がとても落ち着いた印象だ。

緑豊かで、ザワザワしていない。開発主体のしっかりしたコンセプトと、トータルにプロデュースする能力の存在を、説明前からイメージできた。

ビルダーの情熱をコンペで引き出す

担当者から、この分譲地は「ガス会社が地元の小さな電力会社を買収して、モデルケースとして立ち上げた」という説明を聞き、さらに納得できた。

エコロジーコンセプトを事前に確立し、それに従って地元ビルダーに公募コンペを行う。共通ルールとして、エネルギー自給を行う「ハウジングアソシエーション（住宅組合）」を形成することを、コンペ第一の要件にしているのだ。

コンペを通過するには、参加ビルダーそれぞれの理解と工夫、そして情熱が必要である。「完売するためのテクニック」とは別のエネルギー原則を、つくり手の主体的参加によって上手に引き出し総合する。高いレベルのプロデュース手法が、この場所の豊かな空気感を形成しているのである。それぞれが、精魂こもった住宅群と言えよう【写真下】。

ガス会社であるがゆえに、将来の燃料電池対応やエネルギー供給の未来像も見据えた「ペイできる」モデル形成になっているとのことである。

盲目的な補助金前提の開発と違って、非常にスマートでバランスが良い。民間の「個」の力を上手に引き出すコンセプトの作成、実施能力。たとえば、ガス会社のような半官半民ともいえる開発主体が、住まい手やビルダーの視線でこのプロデュース能力を発揮するとき、ここで見られるような豊かな街区が形成できる。

エコロジーとエコノミーのギャップを超越するポイントのひとつは、開発主体がビルダーや住まい手の少しずつ持っている相互扶助的意識を、いかに結集できるか。

さらに、建築が本来目指す「普遍性への志向」。その大切な要素は、職人がみな持っている「良心とプライド」をいかに引き出せるかという力量にもかかっている。

より良いドアをお求めの方は
扉革命 検索 とご検索ください。
当社ホームページがご覧になれます。
開発販売 RDクロイワ建材株式会社 TEL.03-3816-4317
〒113-0033東京都文京区本郷3-18-1奈良部ビル5F FAX.03-3816-4318

〔グリーン購入法特定調達品目〕
リサイクル木材90%以上の
外張断熱材

自然素材
リサイクル木材90%以上の木繊維を圧縮成形した木質断熱繊維板。
＊木繊維中のリサイクル木材の比率

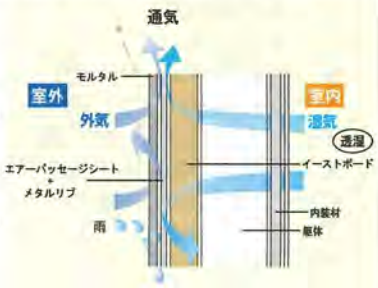
調湿性能
木材繊維特有の吸放湿性に富み、室内を快適な環境に保つため結露を防ぎ、家を長持ちさせます。

再利用
使用後工場にて、再生産可能な環境に優しいエコ建材。

防火性能
イーストボード40mmの外側からの無垢板直張り工法にて、30分防火構造・45分準耐火構造の試験に合格。
木ならではの高い防火性能を証明。
モルタル工法も30分防火構造45分準耐火構造の試験に合格。
（国土交通省大臣認定取得済み）

断熱性能
グラスウール16K相当の熱伝導率。（0.045W/mK）
遮熱性にも優れているため夏場の屋根断熱・遮熱にも効果的。

防蟻性能
防蟻処理済み。（壁用のみ）



～透湿する家づくり～のカタログを差し上げます。
《断熱・透湿・遮熱 Total Catalog》

品番		幅×長さ×厚さ（仕上がり寸法）	定価
屋根用	EB-4	455mm×1,820mm×60mm	2,900円/枚
壁用	EB-9	910mm×1,820mm×40mm	4,800円/枚

URL http://www.nagai.co.jp/
株式会社ナガイ
〒395-0803 長野県飯田市鼎下山882-1
TEL (0265) 24-7111 FAX(0265) 24-7164

建材事業部 Tel (0265)28-1221 Fax (0265)28-1220
東京営業所 Tel (03)5772-4701 Fax (03)5772-4702
名古屋営業所 Tel (0568)94-7551 Fax (0568)94-7550
大阪営業所 Tel (06)6990-8011 Fax (06)6990-8012
九州営業所 Tel (092)586-3281 Fax (092)586-0194
２×４事業部 Tel (0265)21-1577 Fax (0265)21-1578
上伊那支店 Tel (0265)85-0150 Fax (0265)85-0151
中津川営業所 Tel (0573)68-3655 Fax (0573)78-0065

ドイツ・エコロジー住宅 エコロジーとエコノミーのギャップ

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

寄稿

㈱LDKHOME&
LDK㈲
代表取締役・玉田敦士

http://www.ldk.co.jp

たまだ　あつし
建築プロデューサー。1962年 大阪生まれ。建設会社勤務を経て、95年 建築プロデュース会社LDK inc.を設立。同代表。「WIRED DINER」を始めとする多くのカフェ・店舗を手がけ、現在は住宅プロデュースから企業コンサルティングまで幅広く活躍。

前回まで3回にわたってエコロジーとエコノミーのギャップを克服する開発のポイントについて述べた。今回はエコ分譲建築の持続的価値について、1925年のブルーノ・タウトの集合住宅を、リポートを通して考えてみたい。

ブルーノ・タウトの馬蹄形ジードルンクの普遍性／ベルリン 4

共同住宅の目標地点は、タウトの理想再現にあった

エココーポラティブ 20年後の実情

ハンブルグからベルリンに向かう途中、エココロジー集合住宅の原点ともいうべき、鬱蒼たる緑に囲まれた、エココロジーコーポラティブの集落に立ち寄った。

それぞれの家は、色も形も違う。しかし一様に、屋根にはソーラーパネルを搭載。各戸の自家発電以外に、共有の集会場地下にボイラーを設け、温水の共同供給をしている。内部仕上げは、もちろんバウビオロギー仕様だ。

1886年、当時まだ世間の認知が浅かったエコロジー運動に共鳴する26世帯が、組合形式で果樹園の土地を共同購入し、「新しい村」をつくった。組合員は当時30代。

20年を経た今、子どもたちは皆独立し、夫婦ともに60歳前後になった各世帯は、いまでも電力や温水の自給システム運営を立派に続けている。

庭には誰も乗らなくなったブランコが朽ち果てていた。恰幅のいい住民代表のブース女史は、このまま皆年老いていったときの心配を、泰然自若たる自負心を感じさせながら、静かに語ってくれた。

80年前のタウトの仕事「ジードルンク」

私にとって、今回ツアー最大成果のひとつは、ベルリンでブルーノ・タウトのジードルンク（ドイツ語：集落）を多数見学できたことだ。

この行程は、ツアーの日本側コーディネーター・野沢正光建築工房代表・野沢正光氏の静かなメッセージと受け取っている。改めて感謝の念でいっぱいである。

ツアーコースに入っていたツェーレンドルフの「森の中のジードルンク」と、野沢氏にご案内いただいた「馬蹄形のジードルンク」。いずれもすばらしいものであった。

タウトのジードルンクは、すでに80年の長寿命。1925年から1931年にわたって、大量に供給された。いずれも2000戸規模である。

1933年にナチスが政権を奪取して、タウトが国外亡命を余儀なくされるまでの奇跡的出来事だ。ニンゲンの「理想」も捨てたものではない。

当時は小さな木であった赤松が、大木の林になって手入れの行き届いた芝生の上に程好く湿潤な空気感をつくり出す。これこそが持続する「価値」と実感できた。それぞれの建物は、今でも斬新に感じるカラーリング。それが赤松の緑と調和して感じられる。

赤松とのコントラストが美しいツェーレンドルフのジードルンク

建築の形態が社会との関係性を表現している馬蹄形ジードルンク

馬蹄形ジードルンクは、さらに驚いた。ちょうどオリンピック競技場の観客席が、共同住宅なのだ。グランドが共有の庭園になった形。庭園の中央には、子供たちが遊ぶ池、ビオトープがある。

アメリカでセキュリティーのために周りを塀で囲った住宅地「ゲーテッドコミュニティー」の将来性が注目されている。

しかし、この「馬蹄形」は、建物自体がその機能をごく自然に果たしている。しかも外部社会に対しては開かれたコミュニティーで、建築形態が、社会関係のあり方をさりげなく表現している。

エココロジー分譲開発 4つのポイント

また、案内してくれたブレンネ事務所は、これらのジードルンクの色彩復元の仕事をしている。記念建造物保護法によるものだが、まさにプロパティーマネージメント（以下PM）が、このすばらしき社会的資産を維持拡大化させているのだ。

ブレンネ事務所は第1回でリポートしたハインリッヒベール共同住宅の設計事務所だが、ドイツエコ分譲の目標地点は、実は1925年のタウトの理想主義を再現することだったのかもしれない。

私の寄稿の最後に、今回ツアーで抽出できたエコロジー分譲、開発のポイントを、4つ列記したい。それは①適正な開発規模②開発プレイヤーの合理的編成③ビルダー、住民など参加者の「個」のエネルギーを結集するプロデュース能力④社会的資産としての建築「価値」の維持拡大化（PM）、である。

単独の住宅から、集合住宅、コミュニティーへとステップアップする過程で、日独共通の壁、「エコロジーとエコノミーのギャップ」が横たわる。上記4点を射程に入れ、私はさらに多数の人とチャレンジを共有したいと、新たな思いを抱いたツアーだった。

商品開発も集客も
ブルースホームが解決
ブルースホームの進化はいつも続きがある
「Precious®」シリーズ NEWデビュー

坪単価100万円のインテリアイメージを
坪40万円台で実現

＊＊＊＊＊
ブルース・ジャパン本部が、JKホールディングスの新木場タワーにショールームをオープンさせました。遊びに来てください。（要予約）
＊＊＊＊＊

アルプスの森の
『ハイジの家®』

申込書　FAX 03-5534-3911（宇田川まで）

御社名	
代表者名	
所在地　〒	
TEL	FAX
E-Mail	

① 見学希望　② 説明に来て欲しい　③ 資料請求　※いずれかに○印をつけてください

JKホールディングスグループ
ブルース・ジャパン株式会社
Bruce Home
〒136-0082　東京都江東区新木場1-7-22　新木場タワー6F
tel.03-5534-3900　fax.03-5534-3911

建築の力と自然のちから

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

寄稿

㈱エトルデザイン
代表取締役・髙山正樹

たかやま　まさき
1967年東京都生まれ。芸術家・田原桂一氏に指示。株式会社セッサ勤務を経て1997年独立。建築から家具、プロダクトまで幅広いデザイン活動を行う。

今回は、建築デザインにこだわりを持つ髙山正樹氏に寄稿していただいた。エコバウツアーの参加は初めてながら、来る日も来る日も建築を見続ける旅の中で、「建築を創る」ということにどっぷりと向き合ったという。その感銘や印象を通して、ドイツの建築観を探ってみたい。

「建築は風景を創った」

キンゴー・ハウス／ヘルジンガー 5

風景を取り込む家

「キンゴー・ハウス」を訪れ、木々の中に見え隠れするレンガの家々に出会ったとき、私はそこに「風景」を取り込む住まいを見つけたと思った。

建築の設計を始めて十数年。住宅を依頼されることも多く、住まいをどう創っていくかというのは、自分にとっていつも大きなテーマである。

風や光はもちろんのこと、最近「風景」を取り込むことが主眼にある。都市、山、海。それぞれ風景は異なるし、人によって、生活によっても「風景」の意味まで変わる。

その「風景」を取り込む「家」をつくりながらも、うまく伝えられないもどかしさを感じたまま、今回のエコバウツアーに参加。そこで私が最も心に残った建築のひとつが、「キンゴー・ハウス」だった。

1961年に竣工した低層の戸建て集合住宅。管理会社キンゴー建築協会にちなんでキンゴー・ハウスと名付けられた。緑の水辺にたたずむレンガの建築群が、経年とともに風格をかもし、周囲の池の植生と溶け合う

風景を創る家

コペンハーゲンから北へ45㎞にあるシーランド島のエリシノールに建てられた60戸の戸建て住宅群。そのひと区画の風景は、レンガ壁の家々と雑木林の木々や草、そして湖で構成された、大変美しいバランスを持つものだった。

それぞれの家は、中庭を介して隣の家と曖昧に仕切られていて、ゆるやかに繋がる人とひととの関係が感じられ、なんとも愛しい印象だった。

なにより、同じデザインと同じ素材の住まいがひたすら並んでいながら、その絶妙な配置計画と、建築のボリュームと高さ、素材の質感、周辺の自然とが、しっくりとひとつの風景になっていることに感動したのだった。

ウッツォンの仕事

このアトリウム・ハウスの設計者は、オーストラリア・シドニーのオペラハウスを設計したことで有名なデンマークの建築家、ヨルン・ウッツォン氏。

あのシンボリックで斬新なデザインのオペラハウスを設計していた彼が、自然とプライバシーの結合というアイデアを温め続け、これらのシンプルなアトリウム・ハウスを実現させていたことに、まず驚く。

その後、どちらも1957年に着工しているのを知って、ヨルン・ウッツォンの多才な才能を感じないわけにはいかない。

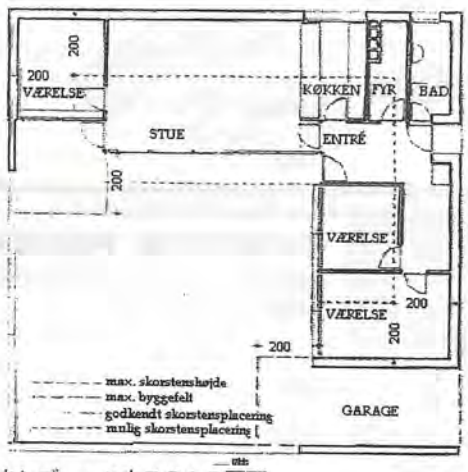
アトリウム（中庭）の風景。中庭まわりの壁は低く、ゆるやかに区切られている感じは好ましい。外の家具やガーデニングの様子から、戸外の暮らしを楽しんでいるのがうかがえる

庭の「間」

この住宅は、ローマ建築に特有なアトリウム（中庭）の様式から、地元ではローマ風住宅と呼ばれているそうだが、私にとっては、日本風と呼びたくなる住宅だ。

ひとつの住戸は、15×15mの正方形プランの平屋で、中庭をL字に囲む形で部屋が配置され、どの部屋からも庭が眺められる。ひとむかし前の日本の住宅にあった、中庭や坪庭にも似たこの愛らしい中庭は、井戸端会議もできそうな空間だ。

隣の家とのゆるやかな繋がり方のちょっとした「間」が、今も昔も変わらぬ日々のひとときをつくり出しているのだろうと感じられる。池を囲むように配置された中庭を見ていると「借景」の庭づくりにも通じているのかとも思う。



キンゴー・ハウスの1F図面

永く生きる住まい

レンガと木の折衷構造でできた「キンゴー・ハウス」は、永く使うことを意識した素材が選ばれている。雨樋ひとつとってもステンレスが使われ、窓枠も錆に強い亜鉛メッキが施されたスチール製。

住まいのパーツとして、厚く強く重い素材が当然のものとして用いられ、住まうことの安心感が伝わってくる。イニシャルコストは決して安くない素材だが、永く良く使える素材を選ぶことは、エコロジーにもつながる。設計していく上であるべき姿と思う。

質量の心地良さ

それに比べて、現在の日本では屋根や外壁、雨樋に至るまで、プラスチック系の建築建材が多く流通している。耐久性はあるものの、自分がこれらの素材にどうしても価値を見出せないのは、人間にとって大切なのは、質量の心地よさだと思っているからである。

手にずっしり来る重さ。素材の冷たさや暖かさ、平滑な面やざらざらした肌触りといった、質感のもつニュアンスは、空間の奥底で響き合うものだ。それらを一生懸命手をかけてつくる職人の技術も愛情も、建築に宿ってきた。

耐久性というような性能ではなく、「永く生きる」ものづくりをしようとするとき、そうした素材と技術のもつ重みは重要だと感じる。

鉄もコンクリートも、アスファルトもプラスチックも、人間に与えられたものであるからには、ひとつひとつの素材を見つめてどう最適に使うべきか、真剣に考えていきたい。

エコロジーとは削減ではなく、自然素材を共有しながら、最後は自然に「還す」という謙虚な気持ちをもって建築を創ることだ。

キンゴー・ハウスは、そういう意識を取り戻し、気づかせてくれた。

建築と自然のちから

人間が、自然の恵である素材を集結させた建築の力。そして、植物や樹木、水辺などの風景との力。どちらもが違和感なくバランスよく存在しあえる関係。これからも考え続け、温め続けてゆきたいテーマを確信できた、出会いの瞬間だった。

輸入建材のオリジナルブランド
Westad Interior Door
大臣認定F☆☆☆☆
JAS認定工場製造
自然の温もりを実感できるムクドア　6'-8"（2032㎜）高
ノッティパイン開き戸
設計価格 ¥37,100～
未塗装
2008/9年度 PRICE LIST できました。ご用命下さい。
レッドパイン開き戸
設計価格 ¥36,400～
PU塗装済
ヘムドア
設計価格 ¥34,100～
未塗装
その他引き戸、折れ戸、ドア枠等各種部材もございます。詳しくはお気軽にお問い合せ下さい。
㈱ビーウェスト
www.bewest.co.jp
本店　名古屋市天白区植田山2-713-2　TEL：052-783-6644　FAX：052-783-6654
東京店　東京都練馬区大泉学園町6-12-6　TEL：03-6303-7800　FAX：03-6303-7801

古材の匠 募集中 入会金 月会費 無料
全国の古材・無垢材を使うことが得意な工務店さん、大工さん、設計事務所さんや内装業者さん、インテリアコーディネーターさん、家具などを製作しているメーカーさんなど古材の普及活動のお手伝いをしていただける方々を募集しております。
メリット
・「古材の匠」ホームページで、各匠の施工事例や特徴などがPRできます。
・古材を使った最新の施工事例チラシや古材商品が使えます(有償)。
お申込・お問合せは、お気軽に
http://www.kozai.net
古材倉庫本部 0120-723-040
Email info@k-aimoku.co.jp FAX 089-968-7787

建築の力と自然のちから

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

寄稿
㈱エトルデザイン
代表取締役・髙山正樹

たかやま　まさき
1967年東京都生まれ。芸術家田原桂一氏に指示。株式会社セッサ勤務を経て1997年独立。建築から家具、プロダクトまで幅広くデザイン活動を行う。

今回のエコバウツアーで、多くの集合住宅を訪れた。今や住空間をつくるのに欠かすことのできない建築であるが、同じ「集合住宅」であっても、時代背景や事業計画によって、実現されたものは実に多様であった。なかでも、特徴的な配置計画をもつ「馬蹄形ジートルング」に強く魅せられた。

馬蹄形ジートルング

ブルーノ・タウト設計の集合住宅として、ツアーコーディネーターの野沢正光氏（野沢正光建築工房・東京都世田谷区☎03・3428・5731）に、予定外でお連れいただいたのが「馬蹄形ジートルング」であった。

ベルリンのブリッツ地区にあるこの集合住宅は、第一次世界大戦直後からヒトラーが政権をとるまでの、ヴァイマール共和国時代に建設されたドイツ初の大規模ジードルング（集合住宅）である。

当時、労働組合、協同組合を基盤とする共同体モデルがうまく機能するかを試しつつ、公共による質の高いジードルングを実現することが求められた。

ここでタウトは、常々大切にしていた住まいに、緑地を取り込むというコンセプトを、新しい集合住宅の環境提案として実現させたという。

馬蹄形の配置が一目瞭然。大胆な構成が、豊かな緑にどんどん取り込まれていくようだ

「馬蹄形」の核

道路に沿って、大きく円弧を描く5層の建築。延々と続くその曲面にまず圧倒される。それが馬蹄形であるとは、図面を見て初めて理解できるほどだ。

円でも楕円でもない曖昧な曲面は、幾何学的なやさしさを体感させる。総長350m。1000戸あまりの住戸にゆるやかな一体感をつくっている。

その馬蹄形の建物を貫く回廊を通って中に入ると、思いがけず、目の前に広大な芝の広場と森が広がった。木々に見え隠れして、遠くに同じ建築のファサードが見える。

巨大な壁のような建築の内部に、こんなに豊かな自然の風景が待ち受けていようとは！

ここに暮らす人たちは、毎日この感動を味わうのだ。中心に向かってすり鉢状につくられた中庭は、求心力を感じさせる。その中央には愛らしい池が設けられ、子供たちはメダカを獲り、大人たちは木立の中で釣りを楽しんでいた。

大胆な構成と繊細なディテール 6

馬蹄形ジートルング／ブリッツ

「馬蹄形」の核は、広々とした緑地であり、住民たちの遊びやコミュニケーションの場であった。建築形態的な「核」が、人々が集まって住まうときのパブリックな生活空間としてもうまく機能している。タウトならではの、構成力の成せる技であろう。

豊かな色彩のリズム感

さらにこの集合住宅を特徴づけているのは、豊かな色彩構成である。大きなボリュームに対して、白と淡いパープルで塗り分けたり、シックな赤茶系を使ったりと、楽しげな色づかいである。

「形態は装飾を排して簡素に、色彩によって豊かな喜びをもたらす」と言ったタウトの言葉そのままに。

道路に面したファサードは、ややクールな印象で、中庭に面した方は暖かくプライベートな感じがあり、空間の意味づけもなされているように思われる。

装飾を排すと言いながら、単なる均一的な集合体にならないよう細やかに気を配った腰壁や、縁取りのレンガのグラフィカルな構成美には、見とれてしまう。

大規模な建築になるほど、人が心地よいスケール感をどのように構成するかは非常に難しい。この巨大な集合住宅では、馬蹄形という大きな配置計画に、核となる自然を呼び込み、色彩によってほどよいリズムをもたらしている。

鮮やかな赤で彩られた窓。雨樋のディテールや、映り込む窓までも、花の色と響き合う美しさ

リズミカルな窓の配置。シンプルな壁に、絶妙なハーモニーや楽しさが生まれている

ディテールは窓に

色彩の構成をさらに引き立たせるディテールが、窓のデザインに集約されている。

窓枠の上下と左右の素材を変えて水平ラインを強調したり、枠を色分けして階ごとに特徴をつけたりと、窓にテンポがある。モンドリアンの絵画のようなガラス割の窓もあり、タウトが楽しんでデザインしている様が浮かんでくる。

街や自然に対して開かれる開口部がこんなにも愛らしく楽しげであることは、そこに暮らす人々にも楽しい刺激とリズムを与えるに違いない。

大胆にして繊細

ひとつの大きな箱が、ただ単に合理的効率的な集合住宅になるか、日々の人々の暮らしを包み込む「抑揚」をもつ住まいとなるかは、大きな構成と細部へのこだわりの間を、どれだけ設計者が行き来して吟味するかにかかっているように思う。

土地のもつエネルギー、自然の力を感じて計画する。大きな構成をまとめながら、人々の生活空間の豊かさに気を配りつつ細部を構築する。さらに、細部のディテールを全体に反映し、再構成する。この繰り返しと呼応が、深みと魅力を持つ「抑揚」のある空間づくりに欠かせない。

タウトの「馬蹄形ジートルング」には、構成とディテールが響き合っていると強く感じた。

美の極「桂離宮」

ブルーノ・タウトが桂離宮を絶賛したことは有名だが、一体なぜなのだろうと感じていた。最近、私自身も桂離宮を訪れ、少し理解できる気がした。

桂離宮の広大な敷地の中に注意深く配置された全体計画と、庭の松や水辺と建築との関係性、門や飛び石、格子や襖に見られるていねいなディテールの響き合い。

装飾を排すと言いながら、生活を豊かにするためのディテールを大切にする、彼自身と同じ精神を見出したのではないだろうか。

そんなタウトの軌跡を垣間見る一例として、彼が来日の折にスケッチ帳に走り書きしたメモを記すことで、私の寄稿を締めくくりたいと思う。

「桂離宮」松琴亭の床の間。研ぎ澄まされた構成美を、市松のコントラストと違い棚にみる

桂離宮備忘録より／タウト

植込、水、魚、小鳥
これら一切のものは
戸外で
最高の美を
形成している
装飾などは
無用の競争であろう
然し一つの装飾
この大きな建物全體のなかで
唯一の装飾は
狩野探幽の静逸な絵のある
謁見の間の違い棚に施された
金色に輝く金具

（訳文出典／『画帖桂離宮』ブルーノ・タウト全集第一巻、育成社、1946年、篠田英雄訳）

工務店の視点から見るドイツ建築

エコバウツアー視察記

(株)イケダコーポレーション主催

寄稿

コスモホーム㈱
代表取締役・鈴木岳紀

すずき　たけのり
1967年名古屋市生まれ。共同組合もくよう連副理事長のほか、町の工務店ネット、あたり前の家ネットワーク、地域マスター工務店などに所属・登録。また「ソーラーれん」の普及活動に力を入れ、心地いい家づくりをモットーに工務店を営む2代目社長。

ドイツの建築といえば、まず思いつくのはデッサウにあるバウハウスである。建築に携わる者として一度は見ておきたいと思っていた建物だ。今回その機会を得て念願のバウハウスを訪れた印象を記してみた。

モダンデザインの原点 7

バウハウス／デッサウ

ドイツ語で「建築の家」

バウハウスは1925年に竣工。建築家・ワルター・グロピウスによる設計は有名だ。この建物がメジャーになったのは、外壁に掲げられたバウハウス(BAUHAUS)のデザイン文字が、新聞を通じて人々に広まったからだとか…。

当時の航空写真で映し出された巨大なガラスウォールを持つ建物と、特徴のあるバウハウスの文字が、ドイツ国民の心に響いたのかもしれない。

「バウハウス」とは、ドイツ語で「建築の家」という意を持つ。その名のとおり、このバウハウスは芸術と建築に関する総合的な教育のための学校であった。

ポール・クレー、ワシリー・カンディンスキー、ライオネル・ファイニンガー、オスカー・シュレンマー、ラースロー・モホリ・ナジ、マンセル・ブロイヤー、ミース・ファン・デル・ローエなど、名の通った数多くの人材を輩出してきたこの場所は、いまでも多くの人たちを魅了し、新しい気づきやヒントを与えてくれる。

玄関と外観。ガラスウォールとバウハウスを象徴するデザイン文字が印象的だ

建物は先の大戦で損壊

建物は先の大戦で損壊したが、国民の力ですぐに再生されたと聞く。それほど、ドイツ国民にとっては特別なものだったのであろう。バウハウスに限らず、歴史のなかで数多くの素晴らしい建物が戦争によって破壊されている。

しかし、簡単に新しいものに建て替えてしまうのではなく、手間やコストをかけてでも古い建物を再建し、大切に生かしている国民性を見ると「簡単には壊さないぞ」という気概が伝わってくる。

何より建築物は、ドイツの国民にとって残す価値のある財産に違いない。私も仕事を通じて、住む人にそうした価値が感じられる住宅を提供していきたいと思う。

建築物は、たくさんの知恵と労力と時間がかかる。それをたった一瞬で破壊されてしまうのは、言いようもなく悔しい気持ちであろう。だからこそ、いや、それ以上に多くを失うからこそ、戦争という行為は絶対になくさなければと、この地であらためて感じた。

この建物は1996年からユネスコによって世界文化遺産に登録された。そして、いまではバウハウスの遺産群としてデッサウ・バウハウス基金によって保護され、未来に引き継がれている。

世界遺産だから守るのではなく、守り続けられてきたからこそ、遺産として受け継がれる。この現実をみると、日本でもまだ守らなければならない建築物が、簡単に壊されている気がする。その現実を少しでも防ぎ、活動もしていかなくてはならないと感じる。

モダンデザインの原点

さて、話を建物に戻そう。バウハウスの内部に入るとまず、窓の大きさに圧倒される。しかし、単に明るいだけではない。落ち着きのある絶妙な明るさがとにかく気持ち良く、空間の広がりも十分に感じられる。

そして、部屋や廊下、ホールにおける色の使い分けが楽しさを感じさせてくれる。すべてにおいてバランスが整っており、適度なメリハリ感を生み出していた。

高さ、幅、奥行、色彩と、目に飛び込んでくるそれぞれの要素によって、心地よい空間が構成されている。加えて、家具の選定と配置にも大いに考えさせられるところがあった。

マイスターの室内の色使いと家具が斬新だ

ここでは、たくさんの建築家が建物ばかりではなく、インテリアや生活用具までデザインしていた。椅子やテーブルなどの家具、照明、食器や時計など、生活必需品にいたるまでデザインし、工業生産している。

そして、考え抜かれたデザインの家具や照明などが、料理でいう調味料のようにその空間を引き立て、良さを際立たせている。まさにドイツの神髄を見た思いだった。

バウハウスのような素晴らしい環境のなかで学ぶことができた学生たちを、とても羨ましく思う。そして、この場所で過ごした多くの学生たちが、いまもなお世界中で建築、芸術、美術などさまざまな分野の人たちに影響し続けている。

バウハウス内の2階ホールに主張するマルセル・ブロイヤーのワシリーチェア

そのことを思うと「バウハウス」は単に学校だけにとどまらず、モダンデザインの思想と手法の原点として、現在に受け継がれているのだと感じる。今後、ぜひ一人でも多くの建築関係者に、この場所を訪れ、その一片を肌で感じ、学んでほしいと願っている。

グロピウスの魅力

バウハウス校の近くには、バウハウスの教師が住む施設が建てられていると呼ばれており、教師用の小さな3つの半独立住宅（二世帯住宅風）と、バウハウス責任者用の1つの独立住宅から成る。

この建物は生活場所としてだけでなく、デザインスタジオを兼ねるものであった。バウハウスと深く関連しており、あわせて見ることで、その存在価値が明確になる。

マイスターの宿舎で、これはクレーの家だった

マイスターたちは、バウハウスで働く傍ら、こうした豊かな環境のなかで新しいものを生みだしていた。私たちも、このように素晴らしい環境のなかで仕事をしたいものだ。良いものを生み出すには、自身も良い環境に身を置くことが大事なのだ。

1926年の夏、開校当時にワルター・グロピウスが集めたマイスターは、ラースロー・モホリ・ナジ、ライオネル・ファイニンガー、ゲオルグ・ムーシュ、オスカー・シュレンマー、ワシリー・カンディンスキー、ポール・クレー。

そうそうたるメンバーが、バウハウスのスタートを切った。それだけに、このワルター・グロピウスという建築家の存在は、とても偉大だったことがわかる。指導者としても優れた生き方は、次の世代に確実に引き継がれ、この地を訪れる人たちにさまざまな魅力を発し続けている。

今回のバウハウス訪問は、建物の考え方・つくり方・デザインの仕方などに対する日本との違いを見つめ、建物をつくる者のひとりとして、自分の仕事のあり方をもう一度見直すきっかけとなった。

いまでも、バウハウスは部分的に応用科学大学として使われ、古い歴史を継続中である。ドイツに行く機会があれば、ぜひ再訪したい場所のひとつである。

エコバウツアー視察記
㈱イケダコーポレーション主催

工務店の視点から見るドイツ建築

地域の景観と建物を守る体制 8

キンゴーハウス2／ヘルシンガー

寄稿
コスモホーム㈱
代表取締役・鈴木岳紀

すずき　たけのり
1967年名古屋生まれ。共同組合もくよう連副理事長のほか、町の工務店ネット、あたり前の家ネットワーク、地域マスター工務店などに所属・登録。また、「ソーラーれん」の普及活動に力を入れ、心地いい家づくりをモットーに工務店を営む2代目社長。

ヘルシンガーにあるキンゴーハウスは、少し田舎に位置するため、自然が多い場所だ。1957年～61年にデンマークの建築家ヨルン・ウッツォンという建築家が提案したもので、別名アトリウム・ハウスと呼ばれている。

美しい自然と共存する建物

ドイツの環境問題に取り組む姿勢は、建物に積極的に現れている。とくに、地域ごとの規制が多いのには驚かされる。

町の景観を崩すような色使いやデザインが認められないのは当然だが、新築が可能な場所も限られている。そのため、多くは古い建物をリフォームして利用している。

それは、町並みを崩さないこと、建物を守ることにつながる。建て替えが多ければ、それに比例してゴミの問題も発生し、環境破壊に結びつく。それゆえに、リフォームによるゴミの軽減、資材の再利用や長期利用といった考え方が有効なのだ。

この建物は15m四方の平屋建てで、レンガと木の折衷構造で構成されており、牧草地・森・池からなる美しい景観の中で連続して建っている。

外には閉じられた外観

いったんなかに入ると自然がふんだんに取り込まれる設計

しかもその15m四方に中庭を設け、視線を外部ではなく、内部に向けさせる設計が特徴的であった。外周には最低限の出入り口と、通風や採光のための小さな窓が数カ所しかなく、外から見れば閉ざされた住宅街（メインの道路からの眺め）にしか見えない。

しかし、いったん建物のなかに入ると、中庭を通して明るく開放された空間が広がっていて、なぜだか守られている安心感を覚える設計だ。

この様な建物が連続している家並みだが、庭先からいったん共有地に出て周りを歩けば、豊かな自然が広がっている。池があり、その周りは、散策できる遊歩道になっている。

大木が立ち並び、その木を利用してブランコが吊るしてあり、子どもたちが自然の中で遊べるように考えられている。ブランコもスチールなどの既製品ではなく、木製の柱や古タイヤをうまく利用しているところに、さりげない環境への配慮が感じられる。

池を中心とした自然の取り入れ方や土地の利用計画が素晴らしく、学ぶべきところが多い場所だ。

水辺を囲むように家々が連なり、景観や自然とともに家々が溶け込んだキンゴーハウス

廃材利用のブランコが自然とともにあり、いい味を出していた

永い維持管理のルールにみる底力

日本では、都市計画は道路や上下水道の整備などに重点が置かれ、自然を取り入れた町並みづくりの考え方まで徹底されている地域は、まだ少ないように思う。

加えて、土地の価格が高く、住宅地は細分化されて、敷地いっぱいに建物が建っている。建て替えが多く、予算の大半は建物に使われ、敷地にも庭づくりの余裕がないのが現状だ。

そんな現状に虚しさを感じてしまうのは、私だけだろうか。小さな家でも、自然を、季節を感じ、それを建物に取り込むことができれば、もっと気持ちの良い暮らしができると思う。

先述の住宅地は、この場所を管理しているキンゴー建設協会の名にちなんで、キンゴーハウスと名づけられている。

この場所に新しく引っ越して来る家族は、このキンゴー建設協会の指示のもと、暮らし方や建物の改装などにおけるいくつかのルールを守らなければならない。

こうした管理が、1961年から46年間も維持され、これからも長く守られていくだろうことに、大変感銘を受けた。このように、古くからの地域や建物を守っていく体制が整っていることは、ドイツの底力であり、最大の特徴でもある。

町並みを意識した家づくり

日本にも、文化遺産や世界遺産に指定されている建物や町並みはあるが、もっと身近な町並みを残すことにも、力を注ぐべきだと思う。そうすることで、地域の古い文化やその地方ならではの工夫に満ちた暮らしの知恵を、後世に残せると強く感じている。

私は工務店という立場から、新しいものをつくっていくだけでなく、古いものを残し、活かしていくことをいま一度考えなければならないと改めて強く思った。

古い建物からは、いまでは失われかけている技術や、長く使える工夫を学ぶこともできる。また長く存在するということは、それだけきちんとつくってある証拠でもあり、その町の財産となる。ドイツがそうであるように。

さらに、建物を建てる時は町並みを意識していきたい。日本の町並みとドイツの町並みを比べてみて、なんと日本の印象がバラバラなことか。これは国の政策の違いなのかも知れないが―。

昔は各地方で大工さんが家を守っていたため、田舎に行くと統一感がある。家のデザインや屋根瓦など、その地方に合ったものを大工さんが選び、家守りをし続けたので、町がきれいに見えたのだと思う。

いまでは全国展開の住宅会社が増え、各地に同じような建物が増えており、味気なさを感じる。古くから残る町並みには、岐阜県大野郡白川村の「白川郷」のように、その土地ならではの家づくりの工夫を見ることができる。

古来に習い、建築に携わる私たちが地域の特徴を意識して、町並みを考えた家づくりをすることで、そこに住む人たちにもその地域への誇りや愛着が、より芽生えるのではないだろうか。

キンゴー建設協会と同様の団体や制度が日本でも根付いていくことに、これからの集合住宅の未来がかかっているように思う。また小規模の開発においても、町並みを意識した家づくりをしていきたいと考える。

今後に向けて、大きなヒントが得られ、考え方の整理ができた旅となった。

活性化木炭水性塗料　天然ヒバ油配合
スーパーカーボンコート
木炭の5倍　天然成分配合　水性タイプ　防腐・防蟻　脱臭　吸放湿
URL http://www.touhoku-carbon.co.jp
(有)東北カーボン販売　〒990-0741 山形県西村山郡西川町大字網取57-4　TEL.0237(74)4744 FAX.0237(74)4756

ドイツKAGO社の薪ストーブ、日本初上陸――
薪ストーブのある暮らしを提案しませんか。

カーゴクランバージャパンは、KAGO社の薪ストーブの正規輸入販売元。KAGO社はドイツのみならずEU域内における暖炉、薪ストーブのトップメーカーとしてその信頼性は高く評価されています。

ビジネスパートナー募集

デザイン性　安全性　品質　コスト

ニュービジネス・新規事業
今注目の薪ストーブを住まいづくりに取り入れたニュービジネスをはじめませんか。薪ストーブのある新しいライフスタイル提案を御社の新戦略にお役立てください。詳しくは、下記までお問い合わせください。

kago CRAMBER JAPAN
正規輸入販売元
KAGO CRAMBER JAPAN カーゴクランバージャパン　〒194-0004 東京都町田市鶴間184
http://www.kago-cramber.jp　Tel.042-788-2601 Fax.042-788-2602

工務店の視点から見るドイツ建築

エコバウツアー視察記

㈱イケダコーポレーション主催

寄稿

コスモホーム㈱
代表取締役・鈴木岳紀

すずき　たけのり
1967年名古屋生まれ。共同組合もくよう連副理事長のほか、町の工務店ネット、あたり前の家ネットワーク、地域マスター工務店などに所属・登録。また、「ソーラーれん」の普及活動に力を入れ、心地いい家づくりをモットーに工務店を営む2代目社長。

軍事施設のリノベーションにみる上質なライフスタイル 9

ボート・ホール／コペンハーゲン

デンマークのコペンハーゲンで驚きの建物を見た。この建物は、1954年に鋼鉄・コンクリート造の建物として建設され、魚雷型ボートすなわち潜水艦の維持管理用として利用されていたものである。それが、67戸のロフト型高級アパートへと見事に変身を遂げていた。

潜水艦ドッグのリノベーション

コンクリートの柱とそれに架かるトラス。重量感のある構造的要素をそのまま利用し、なおかつ古い部分に過度の負担をかけないよう、新しいコンクリート構造を40㎝控えて同じグリッドで配置している。

新旧の構造がきれいにマッチし、素晴らしい空間を構成していた。そもそも、軍事施設として利用されていたこの建物は強固な印象があり、どことなく、当時の情景が浮かんで来る。

まるで今にも潜水艦が入って来そうな気配さえ感じさせる荒々しさのようなものは、大きな倉庫風のシルエットからくるものであろうか。

魚雷型ボートの格納庫の入口であった場所は、当時を想像させられる

トラスに繋がる空間が、広さと強さの象徴である

かつての軍事施設が、いまは平和な生活を営む集合住宅として生まれ変わっている。戦争の痛みを受け止め、不要となったその痕跡を、有効に活用できるかたちにリノベーションし、現在の生活のなかに取り入れる。

その大胆な発想に驚きを感じるとともに、痛みを身近に取り入れることで、いつまでも記憶から消さないでいる姿勢に感銘を受けた。

ボート・ホールの改築を手がけたのは、ヴァンコンステン設計事務所である。この事務所は、低層の集合住宅「Tinggarden」で当時の住宅地の形態をめぐる論争（高層か低層か）に、一石を投じたと聞く。

小規模で自然との触れ合いが感じられるこの住宅は、レンガや木など馴染みのある素材を取り入れ、巨大で無機質な高層住宅に比べ、親しみやすかったのであろう。

パブリックスペースはタウン開発の参考例

こうして、デンマークでは低層住宅が好まれ、同時に、住民たちのコミュニケーションの場であるパブリックスペースのあり方も重視されてきたように思う。

すべてのアパートへのアクセスはこの通路から可能であり、アプローチ兼中庭的空間である通路がここでのパブリックスペースとなる。

水路ゆえ土がなく、直接植樹はできないが、皆が鉢を置き、花や緑で彩りを添えている。ベランダも同様に鉢植えが並び、きれいで明るいファサードを演出していた。ベランダには多くの家でイスが置かれ、自然を身近に感じてくつろぐ生活を思わせる。

一人や一家族で、豊かな自然環境を維持するのは難しい。しかし、何人かが集まれば豊かな環境に囲まれた住空間を持つこともできる。

日本のタウン開発にも、最近でこそこうした考え方が取り入れられてきているが、一般の住宅地にも広く浸透して欲しいと願う。少子化、核家族化が進む現在では、こうしたコミュニティーづくりがますます重要になってくると考える。

この建物に限らずだが、スチールの亜鉛メッキどぶ漬け仕上げを多用したデザインは素晴らしかった。持ち出し式のバルコニーや外部階段に始まり、手すり、ポスト、渡り廊下、外壁などシルバー系の色使いが多く、木との組み合わせがとてもモダンな感じに見えた。

こちらの地域は、寒いせいもありシロアリはいないらしい。だから土に面したところでも木が多く使われており、温かみを感じた。

吹き抜けを通して明るく、暮らし方もシンプルだが、作家ものの良い家具がそろっている暮らしは上質感が漂う

トラスが室内にも繋がり、それを意匠としてデザインしてある

バルコニーからの眺望は素晴らしい。また、ほとんどのバルコニーに椅子やテーブル、鉢植えが並ぶ

窓周りや外壁のジョイントなど通常コーキングで処理する部分の収まりも、コーキングレスとして金物や捨て水きりなどで処理されていた。冬の寒さが厳しいデンマークだからであろうか。

つまり、できる限りメンテナンスのかからないような考え方をしているのだ。長く利用する工夫であろう。日本ではコーキングに頼りっぱなしであるが、これからの住宅ではそういったことも考えていかなくてはならないと感じた。

上質なライフスタイルを求める

デンマークといえば、エコロジーと並び優れたデザインでも知られている。ヤコブセンに始まり、世界的に有名な建築家やデザイナーが多い。寒さが厳しく室内で過ごす時間が長いため、上質な家具や照明が多くつくられている。

資源も少ないため、ハードな産業でなく、ソフトな部分のものを売ることで生計を立ててきた。その結果として、デザインが進んだのであろう。

物価は高いが、福祉環境が整っており生活水準は悪くなさそうである。国民の美意識もかなり高く、自分が気に入った上質なものを長く使うという考え方が一般的だ。

数は多くないが、家具や照明、器など、センスの良いものに囲まれており、家自体が小さな美術館のようである。「100円ショップ」などが各所にあり物に溢れた生活をしている日本人のライフスタイルとは対照的で、ぜひ見習いたい。

デザインを極めると、素材の良さは譲れない。だからこそ、長く使えるものが多く、また、良いものを使用しているから価格も高くなる。そして、大切に長く使う。そんな相関性を感じた。

住まいに関しても同じなのであろう。今回訪れたアパートの価格も、相当高い。片手以上の金額には驚きであったが、だからこそ簡単に壊さず、リフォームを繰り返して長く住み続けるエコロジーへとつながっていくのではないだろうか。

建築後、年々住宅の価値が下がっていく日本の現状も見直しが急務だ。

エコバウツアー視察記（最終回）
㈱イケダコーポレーション主催

工務店の視点から見るドイツ建築

寄稿
コスモホーム㈱
代表取締役・鈴木岳紀

すずき　たけのり
1967年名古屋生まれ。共同組合もくよう連副理事長のほか、町の工務店ネット、あたり前の家ネットワーク、地域マスター工務店などに所属・登録。また、「ソーラーれん」の普及活動に力を入れ、心地いい家づくりをモットーに工務店を営む2代目社長。

フィンランドの自然を意識したアプローチ10
アルヴァ・アアルトのカルチャーハウス／ウォルフスブルグ

今回の旅で楽しみにしていた建物のひとつに、ウォルフスブルグにあるアルヴァ・アアルトのカルチャーハウスがある。もちろん私の期待を裏切らず、とても素晴らしい建物であった。

アアルトの反機能主義

この建物は市立図書館、成人教育センター、講演ホール、作業所、絵画スタジオ、そして読書庭園付きの子ども用図書館をあわせ持つ、複合文化施設である。当時、こうした複合施設はまだ少なく、今でも大変価値のある建物である。

アアルトはフィンランドを代表する建築家であり、デザイナーでもある。その活動は、建築だけに留まらず、家具、ガラス製品のデザイン、絵画など多岐に渡る。フィンランドの紙幣にもなったほど有名な人物である。

彼はバウハウスの機能主義に対し、より人間的なアプローチをしたといわれている。そのためであろうか、彼の作品には有機的なデザインが多く取り入れられている。それはどこか、彼の故郷であるフィンランドの自然を思わせる。

この建物のファサードも連続した多角形で構成されており、個性的なデザインである。入り口の柱や壁に、黒い半円形のタイルが貼られており、その滑らかなカーブと縦のラインのバランスが印象的であった。

正面玄関を入ると、まず巨大なクロークスペースが存在する。この大きさは施設の利用者が多いためだけでなく、冬の寒さが厳しい地域ならではといったところか。

そこから多目的ホールを介して、図書館スペースなどの各空間へとつながっていく。

2階では中庭を中心とし、それを取り囲むように部屋が並んでいる。異なる用途の空間を、こうしたホールや中庭といった中立的スペースを介して組み合わせることで、空間バランスを図っているのが、アアルトの特徴のひとつだ。

この辺りは、住宅におけるデッキやバルコニー、フリースペースのあり方に通ずるものがあるように感じた。

トップライトにみる自然光への憧れ

図書館スペースは上部から自然光を取り入れ、白い天井が光をうまく反射し、空間全体を柔らかい明るさで包み込んでいる。アアルトはトップライトを実によく使う。とくに丸いトップライトがお気に入りで、今回もふんだんに使われていた。

フィンランドでは厳しい寒さの割に雪はあまり降らない。また、緯度が高いため、夏の太陽高度もあまり高くならない。そうした点から、トップライトはフィンランドの気候特性を生かし、明るさを取り入れる有効な手法なのだ。

もちろん断熱のための工夫もされている。窓は2重もしくはそれ以上の構成になっており、奥行きも深く取られていた。これは、夏の直射日光を避ける効果もある。奥行きのスペースを利用して、照明が取り付けられていたのも面白かった。

また、光を誘導しやすくするために、川が流れるような曲線が天井に続き、見る限りでは図書館とは思えない表情である。この図書館は1階と地下階が吹き抜けを通してつながり、大きすぎない程度に空間の広がりを見せ、書架の間を通る狭さを感じさせず、心地良いスケール感だ。

調べものをするためのスペースは、小ぢんまりとした空間で、落ち着けるスケール設計になっている。こうした空間バランスゆえか、この建物の中に居ると包み込まれているような心地良さを感じる。

講演ホールでは、光と風を取り込むために、手動式の縦型ルーバーが採用されている。ルーバーを動かしながら、目的に応じて室内の明るさを調整する。その縦型ルーバーにしても、高さが4m近くあるのには驚いた。

壁や天井も白く、光の反射具合も絶妙で柔らかな雰囲気に仕上がっている。この場所で聴く講演は、どんなものでも素晴らしく感じてしまうに違いない。

光と格子デザインの美しい相性

アアルトの建物のなかで私が気に入っているところのひとつに、階段のデザインがある。とくに、彼の代表的な作品である「ヴィラ・マイレア」の階段が好きなのだが、このカルチャー・センターの階段は、どことなく印象が似ている。

ホールの中央に位置する階段は、手すりを兼ねた縦格子に覆われ、階段が光を通して浮き上がっていくようにも見える。縦の格子が光を呼び込み、2階からの光を1階へと受け流す。見ているだけで、上り下りする姿を想像し楽しくなってくる。

緩やかで上りやすく、スチールと石、そして木を使った階段で、素材の組み合わせのバランスに感心するとともに、きめ細やかな細工に当時の職人技を垣間見て、脱帽の想いである。

格子のデザインは天井にも多用されており、こちらも素晴らしい。光と格子の組み合わせは相性が良さそうである。

屋上に出ると、先ほどのトップライトが様々な形で並んでおり面白い。外部に取り付けるものであるため、おそらく銅でつくられたのであろう。緑青が出て良い具合に深みが増し、屋上空間を楽しく仕上げていた。

雨仕舞いなど様々な問題のあるなかで、当時これほどまでのものをつくったことに驚きを感じた。同時に、この建物から様々なヒントや気づきを得て、今後の仕事に新しいアイデアを追求してみたくなったのだった。

カルチャーハウスの外観は、眼に飛び込んでくるデザイン

ホールは、丸いタイルの壁が印象的

三角形や円筒のトップライトデザインが美しい

図書館の天井は間接的な明かりで、柔らかく包まれる心地よさを感じさせる

高さ4メートルの縦型ルーバーは、なんと手動式だ

室内の色合いが良く、そのディテールに酔いしれる

階段と格子の組み合わせが、明るさを呼び込む。また、照明器具のデザインも個々の場所で異なり、それぞれがとても素晴らしい。空間にあわせてデザインすることで、よりマッチしたものに仕上がるのだろう

世界が認めた品質
THE ICYNENE INSULATION SYSTEM
アイシネン気密・断熱システム
www.icynene.jp
キングラン・ハウネスト株式会社
TEL.03-6427-7065